

【AFP＝時事】イラン革命で退位に追い込まれた故パーレビ国王の息子で、米国に亡命しているレザ・パーレビ元皇太子（64）は23日、フランス・パリでAFPの取材に対し、イランの最高指導者アリ・ハメネイ師の統治が「日々、終わりに近づいている」状況下で、欧米は、協議を通じてイラン指導部に救いの手を差し伸べるべきではないとの持論を展開した。

「（イランの）現政権は崩壊しつつある。今、彼ら（イラン国民）と共に立ち上がり、現政権に救命用の命綱を新たに投げ込まなければ、（崩壊を）促進できる」と主張。

「政権の終えんは近い。これは、われわれにとっての『ベルリンの壁』崩壊の瞬間だ」と訴えた。

イスラエルは、イランの核・弾道ミサイル開発計画の弱体化を目指し、核施設以外の標的も含めて、10日間にわたりイランに空爆を実施。

米国も前例のない攻撃に参加し、イラン中部フォルドゥにある要塞（ようさい）化された核施設などを攻撃した。

イスラエルは、ハメネイ師を殺害する計画を否定していない。

パーレビ氏は、詳細は伏せたまま、ハメネイ師が地下シェルターにいるという情報を得ており、「残念ながら、人々を人間の盾として利用している」と主張。

イラン政府高官およびハメネイ師の家族が国外逃亡する方法を模索しているという、「信ぴょう性の高い報告」を受け取ったと述べた。

また、治安部隊員から、彼らが寝返って反体制派に加わる意思を示しているとの報告も受けていると付け加え、「軍や情報機関の人間が、われわれに連絡を取り始めている」と続けた。



【

写真】イラン元皇太子

取材に先立ち、パーレビ氏は23日、「政権と決別」している兵士、治安部隊員、警察官からの要望が「増え続けている」状況に対応するため、安全が確立されたプラットフォームとして、「公式チャンネル」を開設したと発表していた。

大統領、国王の座に就く可能性は？

パーレビ氏は長年、自身は必ずしも王政復古を求めているわけではないと主張してきたが、イラン政権が最終的に崩壊した後、イランの「国家移行を主導」し、同国を新たな時代に導く用意はあるとの考えを改めて認めた。新体制は、領土保全、個人の自由、政教分離という基本方針に基づくことになるとし、「われわれが求める今後の民主主義の最終形態は、国民投票でイラン国民が決定することになるだろう」と述べた。

そうしたプロセスを主導する際に、自身が将来、イランの大統領、あるいは国王の座に就く考えは？とのAFPの質問に対しては、「私はこの移行を主導するために介入している。その役割を果たすのに肩書は必要ないと思う。重要なのは、国民を奮い立たせる存在でいることだ」との考えを示した。

パリ滞在中、パーレビ氏とフランス政府関係者との公式会談は予定されていない。エマニュエル・マクロン大統領は、「軍事手段によってイランの政権交代を求める」場合、「混乱を招く」と警告している。

だが、パーレビ氏は複数政府と連絡を取っていると主張。「私のチームのメンバーは、さまざまなレベルで、欧米のさまざまな連絡先と高レベルで接触している」と強調した。【翻訳編集】 AFPBB News